

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月24日現在

機関番号：31203

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010年度～2012年度

課題番号：22520771

研究課題名（和文） 粘板岩系石器の生産と流通

研究課題名（英文） Research on Production and Distribution of Stone Implements with Slate

研究代表者

熊谷 常正（KUMAGAI TSUNEMASA）

盛岡大学・文学部・教授

研究者番号：50275583

研究成果の概要（和文）：岩手県一関市の嶺沢遺跡、平前遺跡などで発掘調査を行い、縄文時代後・晩期の粘板岩を用いた石棒類の生産状況について検討した。また、南部北上高地内の石棒生産に関わる資料を集成し、実測図面の作成を通じて、素材・製作技術・流通に関する分析を行った。特に、遺跡間に共通して敲打技法による特徴的な技法が用いられていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：As the results of excavation on MINEZAWA and TAIRAMAE and surrounding site, it was verified that large-scale making of stone clubs of slate, in Jomon late and final periods. The subjects on utilization stone material, making techniques and distribution system, were appreciated observation of artifacts and making measured figures. These stone clubs was made to common technique, elaborate hitting stone techniques, in each sites.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |
| 2011年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2012年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 2,600,000 | 780,000 | 3,380,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、考古学

キーワード：日本考古学

1. 研究開始当初の背景

縄文文化に伴う石棒類は、古くから注目されており、性格・用途に関する研究も行われてきた。近年は資料蓄積に伴い型式学的研究も進められている。石棒類には規格性が強いものがあり、素材として粘板岩系石材が用いられることなどから特定地域で製作された石棒が広域に流通した可能性が考えられる。

流通の実態究明には製作遺跡の状況を把

握する必要がある。南部北上高地には石棒類の素材となる粘板岩系石材が広く分布し、製作に関連する遺跡もいくつか知られていたが、詳細な分析はなされてこなかった。

2. 研究の目的

(1)南部北上高地の粘板岩系石材分布地域内の石棒製作に関わる製作工程や技法およ

び型式構成を確認する。

(2)製作遺跡の資料について石材構成・工程分類・技法を比較し、本地域における石棒製作の実態を究明する。

(3)他地域の石棒類との比較を通じ、本地域で製作された石棒類の流通の在り方を検証する。

3. 研究の方法

(1)岩手県一関市に所在する嶺沢・平前など関連遺跡で発掘調査を実施し、石棒類の製作状況、製作時期等を明らかにする。

(2)関係遺跡の石棒類を集成、実測図を作成し、素材となった石材・製作工程・技法等を分析する。

(3)北上川流域等周辺地域から出土している石棒類について製作工程に基づいた分析や残存状況の確認を行い、石棒類の流通状況を検証する。

4. 研究成果

(1)南部北上高地にあたる岩手県南部に所在する下記の遺跡の資料調査及び発掘調査を行った。北上川水系にあたる黄海川流域では嶺沢Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡と大沢田Ⅰ・苺萱・平前遺跡そして上野平と相ノ沢遺跡、黄海川支流大平川上流域の南小梨蛇王と畑ノ沢遺跡、千厩川上流の清田台遺跡、太平洋水域である津谷川上流部に位置する浮野遺跡と内貝森遺跡の都合14遺跡である。このうち上野平・相ノ沢・清田台は過去の発掘調査による出土資料で、写真・実測図が報告書に掲載されている。南小梨蛇王遺跡も発掘調査が行われているが、石棒類の実測図は未作成で、そのほか採集資料もある。嶺沢遺跡群や平前・浮野遺跡等は地権者等による採集資料が主体で、これまで紹介されていなかった資料群である。これらの遺跡の採集資料を中心に現地での確認を行い、約800点の石棒類および関連石器について、写真撮影と実測図を作成し、石材・製作工程の分類・製作技法等の分析を行った。この資料数は通常の遺跡出土数に比べ著しく多い。このことから調査対象地域内の関連遺跡では、石棒類の大規模な生産が展開していた可能性が高まった。

(2)本研究課題に基づいて発掘調査を実施したのは一関市藤沢町保呂羽の嶺沢Ⅱ遺跡と平前遺跡である。このうち嶺沢Ⅱ遺跡は、調査地点が過去の工事による攪乱部であったため確実な遺物包含層は検出できなかった。

平前遺跡ではA地点において縄文時代後期後半の遺物包含層から土器と共に石棒を検出し、当該期に石棒が伴うことを明らかにした。また、同市室根町津谷川の浮野遺跡でも縄文時代晩期前葉の遺物包含層で石棒の出土を確認した。また、南小梨蛇王遺跡は、後期中葉から晩期前葉にかけての遺跡であり、このいずれの時期にも石棒が出土している。このほか内貝森遺跡は縄文後期中葉、畑ノ沢遺跡は後期中葉から晩期後葉に形成された遺跡であることが判明した。このほか清田台・上野平など縄文中期末葉～後期初頭にかけての遺跡からも、敲打痕をもつ未成品が出土している。一方、本地域内の縄文中期中葉およびそれ以前の遺跡である藤沢町西口十字や黄海段階遺物の分析により、本地域の石棒生産が、縄文時代中期末・後期初頭に開始され、晩期中葉まで継続したことが把握できた。

(3)本地域は前期白亜紀に貫入した千厩トータル岩体(「千厩花崗岩体」)などの大規模貫入岩体があり、これにより周辺の古生界・中生界の泥岩類は接触変成作用を受けている。本地域に分布する石棒類はこの変成を受けた岩石を素材としている。これらを「粘板岩系石器」と呼称した。これには石鋏(有肩打製石斧)なども含まれるが、主体は石棒類である。

(4)この石棒類には、貫入岩体により変成を受けた石材が用いられる。これらをA;黒色粘板岩・縞状粘板岩を主とするものと、B;点紋粘板岩の二者に区分した。Aは剥離の稜が明瞭で敲打痕が白色を呈するものが多く、Bは灰白色を呈し風化が著しく粗い石肌をとる。両者とも新鮮な面は黒色を呈するが風化により相違が増す。この石材A・Bは遺跡によりその構成に差異が認められた。平前遺跡や嶺沢Ⅰ・Ⅱ遺跡など黄海川上流部では石材Aが卓越し、石材Bは僅少にとどまる。一方、津谷川上流域の浮野遺跡内貝森遺跡では石材Bが30~40%近くを占める。また、南小梨蛇王・畑ノ沢遺跡では、石材Bが20~30%となり、津谷川流域に近似した構成をとることが判明した。南小梨蛇王・畑ノ沢遺跡は花崗岩地帯に位置するが、津谷川流域との頻繁な石材供給・搬入活動が窺えた。

(5)これらの遺跡の石棒類には未成品が多い。それを明らかにするため石棒製作工程を剥離調整段階から研磨段階まで八段階に区分し、各遺跡の状況を比較した。その結果、いずれの遺跡でも最終段階に近い研磨段階に相当する資料の比率が20%以下にとどまり、製作途上のものが多数を占めていた。また、気仙沼市田柄貝塚の石棒類の製作工程と

も比較し、本地域の遺跡群が敲打段階までの割合が高く、田柄貝塚より早い段階の作業が行われたと推定できた。なかでも嶺沢Ⅱ遺跡は剥離工程でも粗割段階に想定できる資料や自然面・節理面を残すものが圧倒的であることから、遺跡近隣に石材採集地点の存在が予想できた。また浮野遺跡・嶺沢Ⅰ遺跡では剥離工程で生じたと推定できる横長の調整剥片を検出することができた。これにより製作活動が遺跡内で行われたことの蓋然性が高まった。

(6) 石棒類の素材である粘板岩系石材の形状には、節理起源の長い角棒状の礫と扁平な礫、それに粗大な剥片を利用するものがある。後二者は短い製品にならざるを得ない。基本的には角棒状素材であり、遺跡周辺でも 50cm を越えるような自然礫を数点採集できた。しかし、このような長い素材を一定数以上採集できるような石材産出地点の確認はできなかった。

(7) 製作工程の剥離→敲打→研磨は、各段階を完結して次工程に移るだけではなく、随時幅矯正等の剥離も行われる。また、全体的に敲打技法が積極的に用いられている。例えば石棒頭部を作出するため端部近くに頻繁な敲打を施し、径を次第に減じていき最終的に折断する技法が確認できた。この技法は、浮野・平前・南小梨蛇王の各遺跡で確認され、本地域における特異な手法として評価できた。また、折断後には擦切りにより、平坦化する作業も確認できた。

(8) 石棒類には故意に折断する手法が顕著に見られた。遺跡により差はあるが平前遺跡の約 50% 程度、約 7 割の南小梨蛇王・畑ノ沢、8 割前後の浮野、9 割に達する嶺沢Ⅱ遺跡となる。折断の多くは複数剥離で長軸に直交するようになされ、潰し状の面を有するものも少なくない。折断される長さには 10cm 前後と 15~20cm 前後のものが多い角度で規則性が窺えた。田柄貝塚では、折断された石棒類には石斧に再利用された場合があるとするが、本地域でも類似の資料を確認できたが、確実に石斧に転用した例は見られなかった。

(9) 研磨段階のものは多くないが、研磨痕には長軸に沿い縦位に走るものと斜行するものがある。後者には面取り状の稜線があることから手持ち砥石による研磨がなされたと推定した。また、装飾的な敲打で仕上げる例も確認でき、「連続敲打列」と呼称した。この「連続敲打列」は、細かな敲打が線状に走るもので、直接敲打ではなく、鑿状のものをあて間接的に打撃を加えている。この手法が用いられた資料は、研磨がなされず、器面は

いわゆる「魚々子状」あるいは「梨地」状を呈することから完成段階として施されるものと思われた。特に、縄文後期後半の成興野型石棒には、顕著に認められ、田柄貝塚を含め本地域の特徴的な仕上げ法と想定できた。

(10) これらの敲打や剥離に用いたと思われる製作具としての石器類を特定することはできなかった。また、研磨具である砥石類も同様である。本地域には段丘礫層などはほとんど発達せず多くは崖錐起源の粘板岩類を中心とした角礫を含む層で覆われている。しかし遺跡からは、他から搬入されたと思われる砂岩や安山岩などの円礫類が一定量採集できた。また、入手地点として津谷川を下った海岸部や北上川本流域が想定できた。しかし、これらには敲打痕跡が多少見られるものの確実に敲打具として用いられた石器とは判断できなかった。本地域の関係遺跡と同様に大規模な石棒製作遺跡である岐阜県飛騨市塩屋金清神社遺跡では、安山岩や砂岩などの円礫を素材に端部や複数の剥離による刃部を作出したもの、円礫を打割した粗大な剥片などが多量出土し、これらを製作具と位置付けている。また北上川本流域左岸に位置する北上市金附遺跡でも、石斧類製作の敲打具として「多面体石器」が多数出土している。上述のように本地域にはそれに類する石器類は稀薄であり、この相違が何に起因するかは判断できず、今後の大きな課題として位置付けられた。

(11) 本地域の石棒類に関する記録は、1890 年代にさかのぼる。1891~94 年にかけて、放浪の画人・蓑虫山人 (1836~1900) が旧東磐井郡内を周遊した際に描いた作品の中にいくつかの資料を見出すことができた。彼が描いた石棒や土器類の出土地のひとつが嶺沢Ⅱ遺跡であることを特定できたことは大きい。蓑虫山人は、このほかにも奥玉 (旧東磐井郡千厩町)・曾慶 (旧同郡大東町)・薄衣 (旧同郡川崎村) などで石棒類の拓本を作成し、さらに宮城県本吉や岩手県気仙郡の資料も記録した。

(12) 縄文時代後期後半に出現する成興野型石棒が浮野・内貝森・平前・南小梨蛇王など複数の遺跡で確認できた。成興野型石棒は、円筒形の頭部や鏢状の隆帯が巡り、そこに綾杉状の刻線が施されるなど特異な形状をとる。新潟県村上市奥三面の元屋敷遺跡を調査した池田淳子は、出土した 46 点の成興野型石棒の分析・検討のなかで、緻密な黒色粘板岩を素材とし、未成品が出土せず、共通性ある形態・文様を持つことなどにより、完成品として搬入された可能性を述べ、その供給地として南部北上高地を想定した。本地域には

成興野型石棒が色濃く分布し、その主要な分布地であることは確実である。同時に、その背景として製作地であった可能性が考えられた。また、成興野型にやや遅れて出現する、熊登型石棒も数点確認できた。

(13) 本地域に見られる未成品を主とした石棒類の流通状況を確認するため、北上川本流域や奥羽山脈地域の縄文時代後晩期の遺跡における石棒類の在り方を分析した。黄海川上流域の嶺沢・平前遺跡などから他地域に搬出されるには、川筋を下り北上河畔に出て、その流域を経由して拡がるルートが考えられる。黄海川下流に位置する相ノ沢遺跡では剥離段階の長大な資料が出土しているが、この周辺の古生界は礫岩が主体で、粘板岩も劈開が強く長い素材は得られない。また、このような未成品は少数にとどまる。このことからこの長大な資料は上流域からもたらされた可能性が高い。また、黄海川河口部の対岸にある高倉貝塚や金流川支流の下館銅屋遺跡にも剥離段階の未成品が数点出土している。このことから未成品も搬出されたと見られるが、いずれも数的には貧弱で、広域に及ぶものとは思えない。砂鉄川支流の猿沢川に位置する板倉遺跡、奥州市大文字遺跡・同市久田遺跡など北上高地内の縄文後期中葉の遺跡では石棒類自体が稀薄で、断面が扁平を呈する破片類の出土にとどまる。そのほか、和賀川流域の北上市大橋・九年橋、北上川左岸の平泉町新山権現社、右岸の奥州市川岸場・東裏遺跡などでは、出土点数の多寡はあるが研磨段階の破片が8割以上に達する。これらの石材は北上高地の古生層起源の粘板岩やホルンフェルスであり、本地域の石材と同一のものからなる。このような状況から、和賀川・広瀬川以南の北上川水系周辺域では縄文後期中葉にはある程度の規模を有する集落遺跡でも石棒類の保有は顕著とはいえず、しかも研磨段階、すなわち完成品として搬入されたと指摘できる。

(14) このような消費地では、長大なもの、装飾性の強いもの以外は、加熱・打割され小片として出土するなど、石棒祭祀に関わる行為が想定できた。例えば、大橋遺跡では都合380点の石棒類が出土しているがその大半は細かな胴部破片であった。また和賀川を遡り奥羽山脈の西側、秋田県横手市虫内I遺跡でも、約460点の石棒類が出土し、そのほとんどが数センチ程度の小片であった。個体識別観察からは最少個体数は20数点と思われ、徹底的な破壊行為が行われたことが窺えた。同市前通遺跡でも、ほぼ同様な状況が確認できた。また、これらの破片の多くには加熱痕跡が確認でき、火に関わる場での破壊行為という石棒祭祀の展開が予想できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 熊谷常正、南部北上高地における石棒の生産について――関市室根町津谷川・藤沢町保呂羽地区の遺跡を中心に、東磐史学、査読無、37号、2012、pp.3-6、東磐史学会、トーバン印刷株式会社

〔学会発表〕(計2件)

- ① 熊谷常正、南部北上高地における「粘板岩系石器の生産――関市室根町浮野遺跡の石器群を中心に、岩手考古学会第41回研究大会、2010
- ② 熊谷常正、南部北上高地における石棒の生産について、(岩手)東磐史学会平成24年度研究会、2012

〔図書〕(計3件)

- ① 熊谷常正、盛岡大学文学部、岩手県藤沢町保呂羽嶺沢遺跡群の調査概要、2011、31
- ② 熊谷常正、盛岡大学文学部、岩手県関市藤沢町保呂羽平前遺跡発掘調査概要報告書、2012、50
- ③ 熊谷常正、山口北州印刷(株)、粘板岩系石器の生産と流通、2013、207

6. 研究組織

(1) 研究代表者

熊谷 常正 (KUMAGAI TSUNEMASA)
盛岡大学・文学部・教授
研究者番号：50275583

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：